

# 架空の妖怪をつくる

## 教えて、聞かせて「あなたの」ストーリー



日本語サロンいりり 幸田穂奈美

### 私たちは出会いのプロ

「あなたに会って、ひさしぶりに日本語の教科書を開いたわ」そんな言葉が聞けて私はとても嬉しかった。日本語サロンいりり（以下、いりり）を始めて5年。私は当初、日本語を教えることによって、日本で働いている同世代の外国人たちの力になりたいと考えていた。それがいつしか、彼らの家でお茶したり、一緒にプリクラを撮ったり、国を訪れては丸1週間案内してもらったり。彼らはむしろ、私を相当助けてくれる存在になった。

私たちがどう会うのかというと、例えばタイ料理屋の軒先で1袋100円の空心菜を品定めしている時や、信号待ちをしている時、花火大会に到着した途端打ち上げが終わってしまって呆然と立ち尽くしている時などだ。その瞬間に会うべくして会ってしまっている。

いりりをやっていると、確かに「会う」センサーは鋭い。国も性別も関係なく話しかけて、友だちになろうというこのノリを受け止めてもらう。逆に特定の人に受けそうな恰好をしたり物を身に付けたりして話しかけてもらうのを待つこともある。浜松のインドネシアフェスティバルで私がヒジャブを被って参加したのは、随分話題になったそうな。いりりが「より多くの人が出会い続ける場」になることを目指しているおかげか、ここに関わる人はだんだん人と「会う」プロになっていく。いりりはいわば、「はじめましてのプロフェッショナル養成事務所」だ（笑）。※オンラインの会話グループも運営中。隨時参加可！

そんないりりは、出会いを次の出会いに繋げるために、ワークショップの依頼なども積極的に受け付けている。学童保育で「異文化理解」を伝える講座をしたり、子ども食堂やイベントの運営メンバーに、いりりで会ったみんなを誘ったり。今回のこのコラムでは「掛川百鬼夜行実行委員会」の方に誘ってもらった、地域の人と外国人が交流できるワークショップの企画について紹介した

い。どんなプロセスで実施まで至ったか、当日やその後の反応はいかなるものかを記していく。

### コミュニケーションを諦めたくない

ワークショップの企画にあたり、「地域の外国人住民」を参加者として想定した時に、最も懸念される事項はコミュニケーション方法であろう。違う言語、また「妖怪」というテーマで盛り上がるのか、まずはいりりが定期的に開催しているオンラインでの会話グループにて「あなたの知っている妖怪はあるか」聞いてみた。はじめは難しいテーマだと言われたが、口火を切った人から共鳴して「似たのがある」って盛り上がったり、生まれて初めて見るものに興奮したり。ある人にとっては懐かしいもので、ある人にとっては実は好きなものだった。話を深めていくと、「妖怪」の概念が色々で、そんなひとりひとりの話が聞けたら面白いと思い、ワークショップの像が浮かび上がった。もし言語で伝えるのが難しければ、画像で見せてもいいし、伝えたいという気持ちが通じ合えば翻訳機やまわりの力を借りていくらでもコミュニケーションは取れるはずと信じた。



いりりはかつて、畑を耕していた  
今もきっとお互いの心が耕されているのだ

ここで大切にしたいのは、話を聞く姿勢として「あなたの国」でなく「あなたの」と聞くところだ。

ワークショップに参加してくれたひとりは「妖怪が怖くて、夜眠られなくなってしまいそうだ」と参加をずっとためらっていた。しかし、新たな出会いに期待して来てくれた結果、思わぬ副産物として、「人によって妖怪は幸せを意味する」ということを知り、そもそも妖怪に対するイメージすら変わってしまったのだ。こうして、ひとりひとりのストーリーが誰かのそれと混ざっていく、これが本ワークショップの大きな成果であった。ちがいに一歩踏み込んでみたり、そのちがいを自分にも取り入れてみたりすることで、出会う前の不安は「架空の妖怪」だったんだと気が付く。

ワークショップの当日参加者は、地域の日本語教室の生徒さんや来日したてのいろりメンバーや、普段からよく会う友人、いろいろが手を伸ばした先で出会った親子や、地域の作家さんや本屋の店主など、奇跡の集合体だと感じた。「妖怪をつくるぞ」って人もいるし、「怖い」「知らない人たくさん」「どうやって話すんだろう」って人もいて、それぞれの不安な顔も少し見えた。

まずは来た人たちをごちゃまぜにしてグループを作って、そのメンバーの共通点をより多く見つけたらタイのお菓子をプレゼントする、というゲームから始めた。犬が好きだとスマートホンを持っているだとか、色々な「レベル」の共通点が出てきた。はじめはまるで他人だけど、少しでも共通点がある、そこには肩書きも国籍も関係ないことに気が付くと、もうすっかり長年知り合ったような感覚になれるのだ。そして同じスタートラインに立ってワークショップに参加できるというのは、みんなが主役になれる準備が整った証。もっと話したい気持ちと相手の話への関心が高まる。



ワークショップ当日、このグループがお菓子をゲットした

その後、それぞれが妖怪の見た目や背景を紹介して、それを掛け合わせて、ひとつの新しい妖怪を作る。AIの画像生成を使ったり、発表間際までひねっていたり、グループごと個性に溢れていた。そしてどのグループも、出来上がった妖怪を紹介するのに、マイクを全員に渡るように発表してくれたことが仲睦まじく、微笑ましかった。

結果的に、3つの妖怪を掛け合わせて出来た妖怪で手作りの仮装をし、10月25日の掛川百鬼夜行で披露することができた。日本のハロウィンが初めてだという友人も、あの場の雰囲気を存分に楽しんだようだった。



© hideki sagisaka

掛川百鬼夜行

大きな会場だけど、我々の心地いい過ごし方ができていた

## 他人が他人じゃない社会を目指す

このようにいろりは、誰もがみんな、目の前にいる人と楽しい時間を過ごせるようお手伝いをしながら、他人が他人じゃない社会を作り見守っていきます。毎日の景色だった「あの人」も名前があって、歩んできた人生があって、本当は「わたし」と話したいと思っている。出会いはつながる、私はそう信じている。

最後に、いろりのSNSをぜひフォローしてみてほしい、いざれ Best Friend になる誰かがいるかもしれない。「あなた」と出会って日本語をもっと頑張る人がこの日本社会で救われるかもしれない。



日本語サロンいろり Facebook